明日の淡海

自然と人との共生をめざして

Vol. 8
2003.2.1 発行

ヨシ刈り風景

CONTENTS —"Ohmi" in the future

巻頭特集 **世界が直面している水の危機 いま私たちは何をなすべきなのか** 3
世界水フォーラム市民ネットワーク理事 石中 英司・環境市民代表 枚本 育生・蒲生野考現倶楽部事務局長 井阪 尚司

巻頭言 **世界湖沼ビジョンはなぜ必要か?** 琵琶湖研究所 所長 中村 正久 2

環境人リレーインタビュー 「環境の世紀」に聴く **半世紀以上の歳月をかけて 生命きらめく手づくりの森を** 12
今井 紘一(滋賀県理事員/びわこ地球市民の森担当)

市町村—エコの輪 **里山との共生が、人を豊かにし環境保全の心を育む** 八日市市 17

●地球温暖化防止活動推進センターだより 11 / ●東西エコミュージアム見聞記 20
●知ってますか? ヨシのこと 22 / ●財団のひとりごと 23

世界湖沼ビジョンはなぜ必要か？

琵琶湖研究所
所長 中村 正久

滋賀県や国際湖沼環境委員会（ＩＬＥＣ）は、二〇〇三年三月に開催される世界水フォーラムに向けて「世界湖沼ビジョン」の策定を目指しています。

湖沼はそれぞれその集水域社会の自然・文化・社会経済などの特徴を色濃く反映し、漁業・舟運・リクリエーション・観光など、周辺地域社会の産業の場としてだけでなく、歴史的景観、生物の生息場所などお金に換算することの出来ない価値をもつ存在です。また、洪水被害の軽減や水資源開発など河川流域の社会全体に多大な恩恵を与えます。しかし、湖沼は、そこに生息する生物が地史的時間スケールで固有の進化を遂げるなど他の淡水生態系には見られない特徴をもっており、地球上の生態系の中でも最も脆弱なものの一つです。過剰な汚濁負荷が湖に流出することを防ぎ、その生態系機能を健全に維持しなければ、湖沼は比較的短期間で持続的利用可能な状態から過剰ストレス状態になってしまいます。一旦そうなってしまえば、保全対策事業が効果を発揮する状態に戻すためには膨大な投資が必要で、回復には長い年月を要します。

世界には大小様々な湖沼が存在し、その多くがこういった問題に直面しています。しかし、琵琶湖など一部の先進国の湖沼を除き、持続的な利用と保全を実現するための正確かつ的確な情報の把握、十分な能力を培った組織や体制、必要な財源の確保、利害の対立を調整する社会的仕組み、地域社会の参加や率先した取り組みなどはほとんど実現していません。また多くの湖沼が地球温暖化や酸性化のように地球規模で起こっている問題に影響を受け始めていますが、それに対応する共同の取り組みはいまだ緒についたばかりです。

「世界湖沼ビジョン」は、湖沼の持続的利用と保全のために必要な国際的なイニシアチブと具体的な行動に向けた指針ということができます。この「世界湖沼ビジョン」が琵琶湖のほとりで採択されるということで、我々は世界の湖沼保全に具体的に貢献する新たな一歩を踏み出したということになります。

■巻頭特集■

世界が直面している水の危機
いま私たちは何をなすべきなのか

深刻化する環境問題の中でも特に注視すべき水の危機。
これまで私たちは快適と利便のみを追い求め、すべての源である大いなる水の恵み、
かけがえのないその大切さを軽視し続けてきたのではないか。
今回の巻頭特集では、それぞれの分野で先進的な活動を展開しておられる方々をお招きして、
いま一人ひとりが直ちに取り組むべきテーマを忌憚のない言葉で語っていただいた。

世界水フォーラム 市民ネットワーク理事 石中 英司 氏
環境市民代表 本（すぎもと） 育生 氏
蒲生野考現倶楽部事務局長 井阪 尚司 氏

石中 英司 氏

本 育生 氏

井阪 尚司 氏

―まず、水フォーラムに期待されること、どのようなかたちで参加されるのかをお聞かせいただけますか。

石中　「第3回世界水フォーラム」があるので立ち上げなければいけないというのは確かにあります。前提には、私たちと水とのかかわりがどんどん疎遠になってきていることがあります。その疎遠になってきていることに対して、機会をもうけてもう少し水とのかかわりを見直す場をつくってほしいと…。それには世界水フォーラムというのは良い機会だと思います。ですから、これが最終目標ではなくて、世界水フォーラム市民ネットワークとしてはこれが一つの最終目標で、終われば解散することになっていますが、世界水フォーラムを一つの取っかかりとして、今後も多くの人に水とのかかわりを持ってほしい。そのためにも世界水フォーラムを有効に活用していって、誰もが参加しやすい場をつくって提供したり、そのシステムづくりをしたいと考えています。私としてはそういうかたちでお役に立てればと思っています。

本　我々には水というものが必要欠くべからざるものであるにもかかわらず、あまり関心が無い。特に大阪、京都の人々は水に対する意識がきわめて希薄であると思いますね。これは、よく知られた話ですが、大阪、京都の一人あたりの生活用の水の使用量は、水不足などにみまわれることの多い福岡などに比べると圧倒的に多いのです。このことから考えても我々はまだまだ琵琶湖に頼って、湯水の如くという言葉通りの生活をしつづけています。実際にこのままずっとやって行けるかどうかというと、非常に怪しげだと思うのです。そういう意味でこの水フォーラムで誰もがもう少し水に関心を持ち、大切にする何か行動を始めるきっかけになってほしいと思います。ただ意識が希薄なのは市民だけじゃないのではないかと思うのです。後で申し上げますが我々は全国の自治体の環境コンテストを昨年から始めました。そこで、水に関する質問での回答を見てみると、やはり関西の自治体は認識が低いんですね。特に節水とかの取り組みに関して、他の地域の自治体に比べて、施策がすすんでいない。そこで水フォーラムが、市民とともに施策を実施していくという、自治体に対しての啓発にもならなければならないと思っています。

井阪　滋賀・京都・大阪で世界水フォーラムが開かれることは、私たち市民側にとっても大きな意味があると思います。昨年、滋賀県で世界湖沼会議が開かれましたが、世界的な会議に市民が参加できたことは、生活者として捉えていた身近な水が世界的な水問題とつながっていると認識できた点で大きな成果がありました。その延長ともいえる今回の水フォーラムも市民にとって、水環境問題をよりグローバルな視点から捉えて、課題解決に向けてどのように行動していけばよいかの方法が共有できるのではないかと思います。

もう一つ、淀川流域でいうと、上流にある滋賀県と下流の京阪神との人々の交流が今までうまくできていなかったのですが、この会議をきっかけに流域間交流が市民レベルでさらに促進されると期待できます。専門家から市民に新しい水理論の認識の仕方をご提示いただき、市民が具体的に行動できるチャンスにしたいと考えています。

危惧すべき「水の自由化」今後の大きなマイナス要因に

―世界の水問題は非常に多岐にわたっており、最終的には国際紛争までいくようですが、現在それぞれのポジションでお考えになっている水問題の中でも緊急の重要課題だとお考えになっていることをお聞かせいただけますか。

石中　環境と水の課題ということになると思いますが、水の問題だけが独立しておかしくなっているのではなくて、環境すべてに渡って、さらに悪くなっているのではないかと実感しています。たとえば、その一つの原因としてマレーシアにある第三世界ネットワークのマーチン・コーという人が文書を出していますが、最大の原因はグローバリゼーションだろうと。この十年間に経済のグローバリゼーションが急速に進んでWTO（世界貿易機関）が凄く力を持ってきて、たとえば多国間の環境条約などが貿易ルールの下になってしまった。貿易のほうが優先されるようになり、競争の激化にともなって環境というのが顧みられなくなっている。それが大きな引き金になっているのだと。私どももそれは感じているところです。今回の水問題に関しても経済のグローバリゼーションの中で水というものを考えたとき、その水環境が非常に悪くなっています。特に大きな課題と考えているのは「水の自由化」ということです。日本では馴染みのない言葉ですが、海外では水自身がどんどん自由化されて、たとえば水利権の売買や水道事業の民営化がかなり進行しています。日本でも民営化は部分的には行われているのですが、すべてが民営化されている例はな

く、公営企業が行っており、水を供給する義務・原則があるからすべて民間に委託することはできないという立場をとられているようです。これがアジア・アフリカなどの南の国へ行きますと、どんどんそういうのが具体的になっていて、水の自由化と水道事業の民営化がセットで進んでいます。フォーラムの中でも、水そのものに価値をつけようという発想（フルコストプライシング）が出てきています。今まで水は「ただ」のもののように感じてどんどん使うわけですが、実は「ただ」で得られるものではなく、水を貯めて処理して家庭の蛇口まで運ばれる施設があってというようにコストが必要なわけで、水は価値のあるものであると。それなら当然その価値に値段をつけましょう。そして公営企業がやっていると結局コストを無視した無駄遣いになってしまうので民間企業がきちんとコストを考えながらやりましょうという考え方があり、それで民営化を進めようという例がいくつかあります。

南米のボリビア・コチャバンバの街の水道事業はアメリカ企業の参加もあり、民営化されてしまいました。今までの水道料金ではコストが合わないので値上げすることになり、そうするとすべての人が水道にアクセスできるわけではなくなります。そのため、多くの市民の不満が募り、結局暴動にまで発展してしまいました。その結果、政府は水道事業を再び公営化に戻しました。それでアメリカの企業が撤退したわけですが、ただで撤退したのではありませんでした。自分たちの事業が順調に展開していけば今後これだけの利益が上がるはずだったが、急にそちらが撤回したから利益が上がらなかった、ということでボリビア政府を訴えています。

水に関する政策を決定する過程に誰が参加しているのかが非常に重要になってきます。私たちは世界各地で影響を直接受ける人々ではなく、別の人たちが水の自由化を決めて推し進めていることに非常に大きな危惧を抱いています。日本でも近い将来、そういう問題が起きても不思議ではないと思っています。特に大都会などは民営化しやすい環境になっています。そういう所へはどんどん民間資本が入ってきて水の整備がされ、逆に地方の中小都市などは資本が入らず、水道事業体の赤字がますます膨らみ、運営がさらに行き詰まってしまうことになるのではと危惧しています。ちゃんと水がもらえる所とそうでない所、別の言い方をすれば、お金がある所には水は来るがお金の無い所へは水は来ないというふうなことが水の自由化の結末として出てくるのかなと…。非常に危ういと思っています。

本　水問題というのは単独に存在する問題ではない。水問題にはいろいろな環境問題が大きくかかわっている。我々は京都にいますから、やはり「京都議定書」が気になります。実は地球温暖化と水というのもすごく大きなかかわりがある。でもそれが意外に一般的には意識されていないのではないかと。地球温暖化が進むと世界的な水不足が起こることが科学的にわかっている。簡単に言いますと、「極端化」という言葉を使っていますけど、現在、乾燥気味な地域ではもっと乾燥するであろうと。当然、水不足が起き、それから食糧生産にも大きな打撃ということになります。

一方、現在雨量が多い日本を含むアジアモンスーン地帯は、雨量が増えると予測されています。雨量は増えるのですが実際に使える水は、反対に減少していきます。なぜならば雨の降り方が変わる、つまり、集中豪雨化が進むためです。すでに、大阪や東京の気象台の降雨データを見ても昔よりははっきりと集中的になってきています。市民の感覚からいっても、この頃の雨の降り方は昔とだいぶ変わってきたと言う人が多い。ザーッと降ってサーッとどこかへ行ってしまうことが多いと感じられる。これがもっと激しくなっていくわけです。ですから、洪水などももっと頻繁に起こるようになっていきます。このような状況になっていくと、水不足と洪水が日本でもさらに起こるのではないか。今も部分的、季節的には起こっていますが、これが慢性的になり得る危険性があることを知らなければならない。これと食糧不足は関連している。地球温暖化による温度の上昇と水不足によって、食糧不足が慢性化していく。日本は食糧の大輸入国でして、世界的な水の不足というのは日本の食糧事情にとっては大きなマイナスになるだろうと考えます。このように、地球の温暖化と水のことはまったく別のことではなくて極めて密接な関係だと思うのです。来年春に京都・滋賀・大阪で「第3回世界水フォーラム」があるというのは、非常に意味のあることだと考えています。これを結びつけて考えて、各々の解決策を一緒に考え、行動、提案していかなければならないと思っています。

井阪　水問題は単に水質だけの問題ではない。温暖化の影響で大量に水が出る所とそうでない所が出てくる問題、それと

関連する農産物への影響。水問題を通して我々の社会のあり方や生活のスタイルを考えていかなければならないと思います。もう一つは、水の量差の問題です。日本はたくさん雨が降っても砂漠地帯に水を運ぶことはできない。しかし、それに代わる方法で水を供給するにはどうすればよいのかということを考えることはできる。たとえば、困っているところに井戸を掘るとか、植林するとか。水を通して私たちは何ができるのかという問題提起や解決に向けてのアイディア等々は出し合えると思うのです。また、水の管理の仕方についても再考が必要だと思います。人の歴史は水を管理してきた歴史ともいえます。現在では管理し過ぎて、ファジーな部分も切り捨ててスッキリしてしまった。この五十年間の水管理の広域化が、生活者としての水を疎遠にしてしまった好例でしょう。五十年前は経済的に大きくなかったかもしれないが、「目の前の水を汚さないでおこう」という気遣いがありました。それが、琵琶湖の水を守っていたともいえます。

―滋賀県では特に里山などは長く続いてきたものですが、それがいつ頃から途切れたのでしょうか。

井阪　水道ができる前は、暮らしの中では水を担いで運んでいた。だから水の価値もわかっていた。もったいないと。今は蛇口を捻れば水がジャーッと出てきますから、価値観が希薄になってしまっている。私たちがやっている水路調査で気づくことは、かつて神様が住んでいるから汚してはいけないと言われていた家の横の溝が、いつの間にか排水路になってしまっていることです。この出来事は、この五十年間のことで、日本だけの問題ではありません。

本　昭和三十年代にエネルギー革命が起きて里山に入る必要がなくなった。労働は軽減されたけれども、里山との付き合いがなくなった。これが昭和三十年代です。エネルギー革命が温暖化に結びつき、今おっしゃったように里山と水にも関係しています。

石中　一九六一年頃に材木の輸入の関税がゼロになりました。そこから日本の林業はどんどん変わっていったわけです。

井阪　農村へ行きますと、水というのは循環しているものだと、特に七十、八十歳代の方たちはちゃんとわかっている。我々が環境で水問題だといった時に、感覚的に言葉、文章ではつながるのですが、感性としてはつながってこない。我々の心の中に自然を感性で捉える眼を取り戻さないといけない。内面をなんとかしなくてはいけないと痛切に感じます。

本　昔は水は自治的な地域の一番の共有財産だった。皆でそれを守る管理をしなければいけなかった。まさに自治の象徴みたいなものでした。それがいつの間にか行政などが管理し、他人事のようになってしまったわけです。

井阪　昔は自治区の人が管理して、どうやって流れていって、どう使われていくのか全部知っておられた。目の前の水が見えていた。それが大きなシステムに変わってしまうと、ここからここまでは知っているがそこから先は知らないよと、よそごとになってしまうのです。

流域の人々が交流する場を創り環境教育の担い手を育む

―世界水フォーラムに絡めての個々のご活動の具体的な内容などを。

石中　もともと私たちの設立の目的というのは水に関する関心を高め、水フォーラムに市民参加ができるようなシステムをつくることです。そうすることによって本来あるべき多様な議論だとか実践の場を実現する足がかりができると考えています。またそれぞれの地域だけでなく、流域全体で水を考えることも必要であると。これをわかりやすい具体例でいえば、一つの河川流域をモデルにして、その流域全体で水問題を考える場をつくっていく。たまたま私たちのメインの場所が京都だったので、桂川を中心に上流と下流の交流事業を京都府との共同事業というかたちで始めて、流域見聞、講座、ワークショップなど多彩な活動を重ねてきました。参加していただいているのは、各地の地域で活躍されている方やそこの行政関係の方を含めた方々など、広く呼びかけながら今まで続けてきました。

先月は京都府の京北町でのワークショップを開きました。その後、先々週の土・日も日吉町に行きまして、そこでも現地の人と現場を廻りながらワークショップを開いて、今後どのようにしていけばよいのかと。特に下流は水を受け取る側で上流は水を渡している側で、お互いによくわからない。それなら、わかるようにもっと交流する機会をつくらなければならないだろうと。で、まず手始めに限られた流域になりますが、その中で試してみましょう。それがもっと大きくなれば流域全体でそういうことができる。今は桂川流域だけですが、とりあえずは交流を継続して、水フォーラムが終わっ

てもこのかたちは残しておきたい。そしてそれぞれ皆が毎年どこかでこういう事業をやって、それが大きくなっていけばと願いながら事業を進めています。

本　一九九二年に結成しまして、今年でちょうど十年を迎えました。目標は非常に大き過ぎてなかなか叶いそうにないのですが、持続可能で豊かな社会を皆で築くというのが私たちのミッションになっています。何年かかるかはわからない。だから、解散もできない（笑）。目標があまり大き過ぎますので、現在、具体的な中期目標として三つ掲げています。一つは未来世代に伝えたいという考えから、環境教育に取り組んでいます。日本の中でもっと盛んにしたいのです。我々の分析によりますと、まず環境教育の担い手の不足が圧倒的だからその担い手づくりに貢献しましょうということです。二つ目は我々のライフスタイルを変えなければいけないと。ライフスタイルを自ら実践して提案するというようなことをやっています。これはグリーン・コンシューマー活動が中心です。あともう一つが「エコシティをつくろう」です。日本を変えるには地域から変えなければいけないのではと思っています。具体的には環境首都のコンテストを開いたり、各地域の自治体の首長さんに集まってもらって戦略会議を開いたり、たとえばパートナーシップ活動で環境基本計画をつくるお手伝いを地域で行ったり、そんなことをしております。

　我々の会は内部に十八ほどの活動グループがあって、その一つに最近つくった「水チーム」というのがあります。これは私たちの理事が水フォーラムがあるからつくろうと呼びかけたものです。今までなかったのがおかしいということで…。具体的に何をやるのかという前に自らがまずもっと勉強しなければならない状態で、お二人と比較すれば、水に関してはまだまだこれからかなと思っているんです。今そこでやろうかなと考えているのは、単に水チームだけではなくて、我々の持っている今までの活動のノウハウだとか実績をうまく活用した方法です。一つは来年の三月に向けて環境教育の、特に水に関する環境教育でもっと総合的なノウハウだとか教材作りなどをやれないかと考えています。ただ三月までには到底できないでしょうから、これは継続的にずっと続けていきたいんですが、三月にはこれの模擬授業みたいなものをぜひ学校等と提携しながらやれたらいいなと思っています。実はいま大阪府からの依頼で府のいくつかの学校で私たちなりの環境教育を試みているところです。実践講座を子どもたち相手にやっているんですが、その中で、水についてやってほしいと言われまして、具体的に小学生を相手にどうやったらよいのかを、今現場に赴いて実際にやらせてもらっているところです。

　それから、生活を変えるために「買い物から変えよう」というのをずっと提案しているんですが、その中でも、水というものは昔は買い物の対象ではなかったが今ではそうなってしまった。こういうことからいったいどんな社会が見えてくるのだということを提案しているところです。もう一つは、やはり自治体が水というものに一体どう対応しているのだろうか。これがどうも本当に水というものを我々の生存の基礎なのだとして、だから大切にするのだという考え方の行政になってないんではないかと感じています。水道行政と河川行政があって、それがばらばらですし、他の部局では水のことなど露知らずといったような行政の仕方をしているのではないか。こういうことに対して、我々は持続可能な地域をつくるために、もっと水というものを総合的に捉える必要があるという提案を、首都コンテストを通じて提案し始めているところです。ただ、実際にやり始めてみて、とにかくあまりにもいろいろな局面から見ることができるので、実に壮大なテーマだなぁと実感しているところです。

井阪　蒲生野考現倶楽部の「蒲生」は地域名。「考現」というのは現在の姿を見ながら過去・未来を探っていく考現学から出ている言葉です。「倶楽部」というのは、どうせやるんだったら楽しくやろう、面白くないことはしない、そんな発想で生まれました。発端は十三年前です。滋賀県は環境熱心県といわれていて、学校教育に環境教育実践推進校という制度があります。当時、私が勤務していた学校が三年間この推進校に指定されました。学校というのは研究指定が終わると、また次の研究が始まります。数年もすると前の実践が形骸化してしまう。地域では、凄い勢いで浸透していった石けん運動が下火になって、スーパーマーケットの店頭には合成洗剤が多く占めてしまっている。これはどうしたものだろうかと。どうも我々が学校でやってきたことも石けん運動も、根本的に見直さないといけないのではないかと石けん運動を一生懸命にやってこられた方と話が弾みました。行きあたったのは、継続して自分たちの身近なことを調べていくことが原点ではないかということでした。

　蒲生野考現倶楽部の組織の中の一つに環境をマネジメントしようというセクションがあります。設立当初からずっとやってきたのは、人は水とどうかかわってきたのかについて「生活と溝・農業用水とため池・川と琵琶湖」を調べることです。環境マネジメントに関しては、田んぼが大きく四角に変わる土地改良という農業問題が大きく関係します。数百年から千年、二千年と歴史を持っている農地が激変したのは、昭和の後半。この変化の中で、私たちがやってきた水管理がどういうふうに変わったかを探っています。また、ゼロエミッションというプロジェクトでは、循環を生活システムの中にどう構築するかということを考えています。洗剤のことから言いますと、石け

んや合成洗剤を使ってきましたが、バイオで分解してくれるものはないだろうかとメンバー会議で話題になりました。そこで、去年からバイオの力で分解するように考案された洗剤を試験的に試して広げています。

　倶楽部のもう一つ大きな事業は、文化を創っていくことと体験的総合学習の推進です。今まで環境問題というと、とにかく解決することから出発しますが、解決したらそれで終わることが多い。「環境」にかかわるもう一つの方向性は、文化として咀嚼（そしゃく）していく姿勢が大切ではないかということになり、イベントや学習会などを行っています。さらに、このセクションでは、子どもたちが河原に入らなくなったことに注目しました。ここ三十年ほどのことです。近くにある佐久良川について子どもたちに「あなたは河原で遊んだことがありますか」と調査すると、小学校四年くらいまでは結構行くんですが、六年生くらいになるとちょっと減って、中学校にもなると九〇％が行ったことがないと答えています。学校の横に川があるにもかかわらず行っていない。これは大変なことで、川での経験がないと周りの水を認識することができないことに気がつきました。そこで、昔おじいちゃんおばあちゃんがこんなことをして遊んだよという魚つかみや筏を作って遊ぶ水辺の遊びのイベントをしたりしています。もう一つは、環境文化啓発を行っています。幸いにも講堂が残っている学校があって、毎年六月にそこでコンサートをしています。去年からランドサットの宇宙映像を駆使して癒（いや）し系の歌手を交えて、広い視野から地球の姿から水を捉えてみるコンサートもしています。その他に、住民参加型の水環境会議なども催しています。これは、日野川の地形・生物・植物・文化歴史・ゴミの五つのテーマで調べる調査研究活動です。また、日野川の水が琵琶湖に入り、その水が淀川に至ることから、淀川水系の上流・中流・下流の人の交流を進めています。昨年は、京阪神の方々に呼びかけて琵琶湖で地引き網を楽しみました。今年は、里山がテーマです。京阪神の方、百五十人ほどと滋賀から百五十人の計三百人以上の規模で五月に田植えを行い、八月に水辺の遊びをして、秋には稲刈りをしました。

　また、日野川の水が琵琶湖を介して京都の平安の池とつながっていることから、「蒲生―平安の人水交流」を進めています。平安の池は、水循環に工夫がされています。濾過装置もついていますので、ブラックバスなどが入ってきません。また、周囲には森があります。そこで、鎮守の森の役割も見直してみようということで交流を行っています。それから、倶楽部が事務所にしている「あたらしや学問所」があります。百三十年ほど前の民家を無償提供していただいているのですが、ここに子どもたちを集めて環境学習をしています。学校では総合学習が始まっていますが、もっと自由なかたちで学べないかと考えたのが始まりです。また、四月から廃校を利用して、三世代で体験活動を行う「しゃくなげ学校」を開校します。

　様々な活動をしていますが、進めていくときには行政とのパートナーシップを大事にしています。特に、イベント募集の時などは、教育委員会の後押しが必要です。行政と共に行うことが大切ですね。

もっとも大切な少年時代の体験受け継いできたものが消えていく

―井阪さんは小学校の先生をしておられますし、本さんも子どもの教育にかかわっておられますが、現代の子どもというのは実感としてどのようにお思いですか。

井阪　地域での子どもの様子を例にすれば、地域行事のリーダーをしていた中学生や高校生たちが、いつの間にか受験などで外れていきます。小学生も少子化で減っています。このような状況の中で、昔は先輩から直接教わり、受け継いでいた数々の体験ができなくなってきています。これは学校の学習では得られない経験でした。本来、このような学びは、自らが対象とかかわって、体感的にその意味を探るはずのものです。その意味がわからないままに川辺に行っても、川の環境を総合的に捉えることができない。もう一度、学校の教育も含めて、「学び」について考え直すべき時期がきているように思います。

石中　実は、環境教育を学校や公的機関だけに任せてよいのだろうかと考えています。環境教育は家庭からはじまるものだと思います。先日、川辺に接しようというワークショップに参加したのですが、投げ網を打っているほぼ同年代の人がいました。彼らは子どもの頃から川辺で遊んでいて、年上の仲間や両親からいろいろと教えてもらっているわけです。ところが、私自身を例に取ってみても、どのように遊べばよいのか、魚を釣るにしても、どのあたりに糸をたれればよいのかがわからない。教えてもらった記憶がない。このような状況だと私の子どももまた何も知らず、自然環境から離れたところで生きていくことになるわけです。これは、親としてよくないことだと実感しています。少なくとも、このようなことは教えていかなければならないのですが、今となっては一緒に学んでいかなければと思っています。

―関西圏を視野においた活動についても少しお話いただけますか。

石中　国土交通省の音頭でつくっている淀川水系流域委員会での議論・報告書を見ると、役所が中心ではなくていろいろな方が参加されおり、参考になります。これからは、流域全体の中で水というものをどのように考えていけばよいのか。ダムの問題や都市部での水道問題や農業

用水の課題など個々の問題もそれぞれありますが、それらがお互いに関係を持ちながら全体の中でどう捉えていくかということが大切です。そのためにも、各地域で水政策に関して、このようにしていこうと決定する場を公開し、誰でもがその場に参加できるようにしなければならないと思います。行政だけではいけないと考えます。現在、井阪さんが行われている活動のようなところから、すべてがつながっていくのだと思います。それが、やがて関西全体に細やかに広がっていけばと願っています。それが、私たちの仕事でもあります。

本　関西圏では、特に京都・大阪・滋賀は琵琶湖淀川水系ですが、京都の人、大阪の人はあまり意識してないと思います。私は大阪生まれで京都に住んでいますが、このようなことをしているので、いわば少数派です。周囲の人々と話していても、琵琶湖をはじめとする水問題を意識している人は少ない。お互いに連携しながら、琵琶湖や流域に対する関心を高めていきたいと思います。大阪の水はどうなってしまったのかと、主体的に考える組織づくりが必要です。基本的枠組みや資金の部分は行政がやらないとだめですが、具体的な部分では民間が動かないとできないのではと感じています。…京都に住んでいて京都の水がまずいといわれるのは哀しいですね。

井阪　琵琶湖に行くと湖をかなり意識できますが、湖から三〇キロほど離れた私が住んでいる鈴鹿山系の麓では、琵琶湖の水質が悪化しているといってもあまりにも離れているのでもう一つ実感がわかない。しかし、よく考えれば、これだけ山手に住んでいても実は琵琶湖の水を飲んでいるんです。田んぼの水も琵琶湖の水なのです。琵琶湖の水がなければ我々の生活もできない。それなのに琵琶湖が汚れていることを他人事のように感じている。この意識の違いは重大ですね。もう一つは、京都は京都、大阪は大阪の認識でなく、この際水系を辿って我々の共通の財産として共有するものをもう一度見つけ合わないと話が進んでいかない。だから、市民レベルでは「交流」がキーワードとなります。具体的に行ったり来たりしながら目の前のものを分かち合う。そういう活動をこまめにやらないとだめですね。研究者や行政と市民とが一緒になって、生活者の視点から「具体的にここをどうしていくか」ということをはじめなければなりません。

先人たちの「暮らしの知恵」をあらためて見直す時が来ている

―世界のNGOや市民レベルの活動でおもしろいケースや関心をお持ちの部分をお聞かせいただけますか。

石中　フィリピン・マニラの南にカエデの葉っぱみたいな形のラグナ湖という湖があり、そこが日本のODA（政府開発援助）で工業化が進められており、工場排水、家庭排水や湖での魚の養殖で使用される餌の過剰投入などで汚染されています。汚水処理場もほとんどありません。琵琶湖以上に汚染が進んでいます。そこで湖を守るために現地のNGOと連携しながら、何ができるのかを探っていたわけですが、現地で驚いたことがあります。バケツ一杯の水がシャワー代わりで、シャワールームもないので狭いトイレでその少量の水を工夫して使うのですが、これでもなんとかなるわけです。彼らは私たちに「何をしてくれるのか」と期待していますが、実は逆に私たちのほうが学んでいるのです。便利なのは確かによいけれども、これと引き替えに、私たちは数多くのものを失っていることを実感させられました。

本　インド洋のモルディブでは二十年前はホテルのシャワーも塩水でしたが、利用者も十分満足していました。しかし、最近は高級ホテル化して、すべて温水の淡水シャワーです。その淡水をつくるために島では膨大な石油を使っています。そのようなことが本当に必要なのでしょうか。我々の考える「快適」というものを各地に持ち込むことで、世界を非常におかしくしているのではないかと思います。これはほんとうに恐ろしいことです。現地の環境大臣と話した時「日本の人々に何か伝えましょうか」とお尋ねすると、優しい表情で「ぜひ皆さんのライフスタイルを変えてください。それでないと、私たちは国土を失ってしまいます」と言われました。

井阪　日本が長い歴史の中で培ってきた「暮らしの中の知恵」をもう一度見つめ直す必要があります。もう一つは、新たな環境社会の枠組みを誰がつくるのかということです。主体者の問題です。これが明確でないと他人まかせになってしまって、よいアイディアが出てこない。そして、いかにそこへ子どもたちが参画していくかです。この仕掛けも重要です。知恵は、学校ではなく、本来は地域の暮らしから生まれてきたものですから。

この特集は、平成十四年十月に行われた鼎談を収録したものです。

「第3回世界水フォーラム」に向けて

私たちの生活になくてはならない水。滋賀に住む私たちは、琵琶湖やその周りの水を使って毎日生活しています。琵琶湖の水がきれいであれば、人間だけでなく、湖やその周りに棲む生きものまでも日々快適に暮らすことができます。

しかし、その琵琶湖では今、様々な問題が起きています。昔ほどきれいでなくなったといわれますし、雨が降らない日が続くと、そこに棲む生きものに影響を与えたり、下流の京都や大阪などに住む人たちが水を使いにくくなることさえあります。また、外来魚やプレジャーボートなどレジャーにおける琵琶湖の適正利用について新しい問題も起きています。このため滋賀に住む私たちだけでなく、琵琶湖・淀川流域に暮らす人々と一緒になって、大切な琵琶湖の水や生きものを守るために日々取り組んでいかなければなりません。

二〇〇一年に開かれた「第9回世界湖沼会議」では、琵琶湖を守るための皆さんの取り組みを世界に向けて発信し、また世界の事例を学ぶことができました。

そして二〇〇三年三月、これをさらに広く世界に発信し、またさらに多くの進んだ取り組みを世界から学ぶことのできる会議が、滋賀・京都・大阪を会場に開かれます。これが『第3回世界水フォーラム』です。

世界では、水が汚れたり、水がなくなるなどして、日々の生活に困っている人がたくさんいます。こうしたことが原因で命を落としたり、水をめぐっての国同士の争いさえ起こっています。このような「水」をめぐる問題の解決を図るため、また将来起こらないようにするために、世界中のNPO、住民グループ、研究者、企業、行政関係者などが集まり、それぞれの知恵や経験を持ち寄り議論を深めます。また、「湖沼」「農業」「森林」「下水道」「流域管理」など、水に関するありとあらゆるテーマが話し合われます。

これらの会議の他に、滋賀県では三月十九日から二十一日の三日間、誰もが気軽に水とふれあう楽しいイベント「びわ湖水フェア」を開催します。水にじかにふれて遊ぶことのできる催しや、水をテーマにしたステージショーなどもあって、ご家族そろって楽しくご参加いただけます。また、展示やシンポジウム、そのほか会議に参加する国内、海外の人たちとの交流活動を通じて、皆さんの取り組みを世界に向けて発信することもできます。

ぜひ「第3回世界水フォーラム」にご参加ください。皆さんのご来場をお待ちしております。

第3回世界水フォーラム滋賀県委員会事務局

第3回世界水フォーラム in 滋賀　案内

「フォーラム分科会」（会議）

◆**開 催 日**　3月20日　、21日（金・祝）

◆**開催会場**　びわ湖ホール、大津プリンスホテル

◆**参加方法**　参加登録（有料）が必要です。

※登録窓口　第3回世界水フォーラム登録事務局

03（5212）1640

「びわ湖水フェア」

◆**開 催 日**　3月19日　～21日（金・祝）

◆**開催会場**　県立体育館、ピアザ淡海、なぎさ公園

◆**参加方法**　入場無料ですので、お気軽にお立ち寄りください。

■**アクセス**　・ＪＲ琵琶湖線「大津駅」または「膳所（ぜぜ）駅」

・京阪石山坂本線「石場駅」「京阪膳所駅」「錦駅」の各駅

※JR大津駅および京阪浜大津駅から有料バス有

■**問合せ先**　第3回世界水フォーラム滋賀県委員会事務局

077（528）3354

URL http://www.pref.shiga.jp/wwf3/

地球温暖化防止活動推進センターだより

地球温暖化基礎知識

前回は地球温暖化とは何か、どうしたら防ぐことができるかなどを簡単に掲載しました。今回は日常的に気をつけることで、温暖化防止に役立つことを挙げてみました。皆さんも少しずつ意識をもって始めませんか？

◆できることから始めよう！温暖化防止

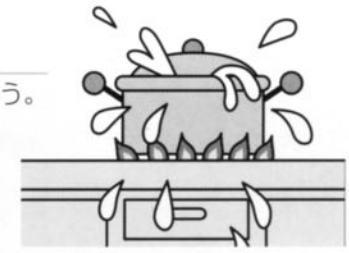
買い物・リサイクル

・レジ袋やブックカバーを断り、自分の買い物袋やカバンなどを利用する。
・過剰包装の商品を買わないようにする。また過剰包装を断る。
・リサイクルの素材を使った製品や天然素材のもの、詰め替えができる商品を選ぶ。
・缶やペットボトルの商品、使い捨ての商品やプラスチック容器のものは買わないようにする。

リビング

・長時間使わない家電製品は、コンセントを抜いて「待機電力」をカットする。
・エアコンは必要な時間だけ使用し、かつ適正温度に設定する。
・服で調整し、冷暖房の利用を減らす。
・生活に支障がない程度の低いワット数の電球を使ったり、白熱灯を蛍光灯に替えるようにする。

台所



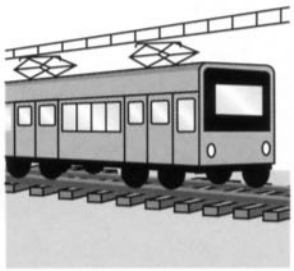
・冷蔵庫の開閉回数はできるだけ少なくし、食品の出し入れも手早く行う。
・食べ残しをしないように、食事を多くつくりすぎない。
・生ゴミは堆肥化して庭木などに使う。
・コンロの火が鍋等の底からはみ出さないようにする。

風呂・洗面・トイレ

・洗面や歯磨きをするときなどは、こまめに水を止める。
・風呂は続けて入るようにし、追い炊きは控える。
・水洗タンクに水を入れた瓶を沈めて節水する。
・湯沸かし器を使わないときは種火を消す。

車

・不要なアイドリングや急発進・急加速・急停車をしない。
・洗車の際はバケツで水をためて使用する。
・タイヤの空気圧を適正にする。
・目的地まで地図を確認し、道を間違わないようにする。



その他

・3階程度の上り下りは、エレベーターを使わず階段を利用する。
・近くの用事の場合は徒歩や自転車を利用し、遠くの場合は公共の交通機関を利用する。
・洗濯機は容量の約8割で使う。
・過大な照明（イルミネーションなど）は控える。

「環境の世紀」に聴く

半世紀以上の歳月をかけて生命きらめく手づくりの森を

「環境人リレーインタビュー21」④

滋賀県理事員
びわこ地球市民の森担当
今井紘一さん

自然の保護と再生をテーマに、野洲川の廃川敷地を活用して、県民はもとより下流府県で環境保全に取り組む人々の参加を募り、手づくりによる豊かな森づくりを目指す。なによりも大切なのはそのプロセスを見守ること。親から子どもへ育樹を受け継ぎ、はるかな時の流れの中で自然の素晴らしさと共生を実感すること。一人ひとりの心を込めた苗木が大きく育ち森ができるまでに、実に半世紀以上を要する壮大な計画「びわこ地球市民の森」が、いま大きく動きはじめた。

―「びわこ地球市民の森」づくり構想の基本概念をお聞かせいただけますか。

今井　三つの要素があります。一つは知事が積極的に推進している「自然と人との共生」への取り組みです。二十世紀は自然の破壊が続いた世紀でした。その結果、各地域から地球規模まで数多くの深刻な問題が生じています。地球温暖化においては二酸化炭素の低減が世界的な課題になっていて、これを吸収する緑の保全と再生が重要な施策となっています。そこで、県民参加による森づくりの構想が出てきたわけです。二つ目はこれからの地域づくりの大きなビジョンとなっている「マザーレイク21計画」です。水質保全・水源かん養とともに自然的環境・景観保全を目指しているわけですが、琵琶湖周辺の生物環境、特に生態系に配慮したビオトープ空間が保全されなければ、これからの琵琶湖を守ることはむずかしいと考えています。「びわこ地球市民の森」を、この一つのプロジェクトにしたいと位置づけています。三つ目は、国において平成十一年にスタートした「住民参加による『平成の森づくり』」事業（平成十四年度からは「自然再生緑地整備事業」）に採択されたことです。このような三つの要素が起点となって県民の手による森づくり「びわこ地球市民の森」構想が動きはじめたのです。

―「県民の手づくりによる森づくり」と

いう発想は非常に新鮮に感じますが、そのあたりのことを、もう少し具体的に教えていただけますか。

今井　「びわこ地球市民の森」構想には二つの考えが組み込まれています。一つは、いま申し上げたように「森を創る」、「自然を再生する」ということ。もう一つは県民参加型で事業を進めていくところです。県民の方々はもとより下流府県の人々、さらにできることならば海外からも参加してもらえるような森づくりを展開していきたいと考えています。まず、植樹。一人でも多くの方に参加いただいて、森を創るために苗木を植えていただく。次に、これを育てていただく育樹。この育成に直接かかわっていただくことを重視しています。県民や企業の方々、NGOの皆様、行政が一体となって二十一世紀の森を創り出したいと願っています。このように共に作業をすること（パートナーシップ）が大きなテーマになっています。行政が基盤の整備、つまり木を植えるための植樹地を造成し、園路や駐車場をはじめとする設備を整えた後、植樹と育樹は県民をはじめとする皆様と共に行うという考え方です。すでに、県民の皆様、企業の方々、森林保全にかかわるボランティアの人々…さらに、県外からも積極的にご参加いただいて、この事業が進んでいます。できるだけ、多くの方々が自主的にかかわっていただけるように、あまり細かいルールのようなものはつくっておりません。

完成した森を見るのではなくそのプロセスを実感してほしい

―県民の方々はもとよりこの構想に賛同する人々が主体的に参加し、それぞれの手で長い歳月を注いで森を創っていく…。それにしても、壮大な事業ですね。森ができるまでに何十年もかかるわけですから、親から子へ受け継いでいくことになるわけですね。

今井　そうです。まず苗木といっても五、六〇センチが五、六メートルになるのには、少なくても十年以上はかかります。それでも、まだ森にはなっていません。ですから、完成した森を見ていただくのではなくて、森ができていくプロセスを見続けることがいちばん大切だと考えています。自分で植えた木がどのように育っていくのか。どんな森になっていくのか。繰り返し来ていただくことで、これらをご自身の目で確かめていただきたいのです。その中で実感的に自然を理解し、親しんでいただき、抽象的な言葉ではなく、自然との共生を感じとっていただければと願っています。これがもっとも大切にしたいポイントです。森ができるまでには早くても半世紀ほどかかります。いま、植樹をしていただいた方々には、完成時の森は見てもらえないかもしれない。もちろん、私ももういない。親から子へ、子から孫へ…。三世代ぐらいを視野に入れた長大な構想なのです。

―「びわこ地球市民の森」の計画地について具体的にお教えいただけますか。

今井　ご承知の通り、滋賀県南部に位置する野洲川は鈴鹿山脈を水源とする県下で最大の河川です。守山市で南流と北流に分かれ、琵琶湖に注いでいました。この分派した三角州の場所の水疎通が悪くて、洪水による災害が頻発していたのです。そこで、南流と北流の間に新放水路を造る計画が琵琶湖総合開発事業として計画され、昭和五十六年に完成しました。これによって南流と北流は廃川となり、跡地の利用が行われてきました。いくつかの構想が生まれ、多少の紆余曲折（うよきょくせつ）があった後、南流の一部を「びわこ地球市民の森」として活用することになったのです。面積は四二・五ヘクタール、延長は三・二キロメートル、幅は最大二〇〇メートルです。なお、北流の最下流部は広域公園「湖岸緑地」の一部としてビオトープ型の整備が平成十三年から進められています。

―河川の上に森を創るというのは条件的にはどうなのですか。このケースの場合

は難点もありましたか。

今井　一般的には良いと思います。河川の両側には河畔林があって、それを活かせますので…。ただ、残念ながらここは良質な砂利がたくさんあって、骨材採取事業がされました。堤防の大部分を壊しているために、これまであった河畔林をうまく活かすことはできませんでした。しかし、視点を変えれば、このような状況だったので新たなゾーニング、つまり自由な計画を立てることができたともいえます。植樹活動がスタートしたのは二〇〇一年の四月二十九日で、現在で約一万三千五百本の植樹が行われています。

県内外から三千五百人が参加し最初に約八千本を植樹

―二〇〇一年の「みどりの日」に植樹がはじまったわけですが、その時はどれくらいの人々が参加したのですか。

今井　一日で三千五百人の方々に参加していただきました。植樹は約八千本です。県民の皆様をはじめ守山市の緑の少年団、ボーイスカウト、ガールスカウト、森林ボランティア、地元の方々、さらに県外からも数多くの皆様が来られました。ご家族も多かったですね。お子さんも楽しんでおられました。非常に良い記念になると思います。また、一度植樹していただくと、自分の植えた木がどうなったのか、いつまでも心に残りますので繰り返し訪ねていただけます。

―当日の植樹は一人一本といった割合ですか。また、一本植えるのにはどれぐらいの時間を要するものなのですか。

今井　平均すると二本から三本です。また、ドングリから育てた苗木を持参していただいた方も数多くおられました。これは、以前から「湖国 樹のホームスティ21推進事業」という啓発キャンペーンを実施していたからです。あらかじめドングリをお配りして家庭で育てていただき、「びわこ地球市民の森」に植えてくださいとお願いしていたのです。植える時間は、五分もあれば大丈夫です。苗木なら、たとえばお子さんでも、木のことをあまりご存じない方でも簡単に植えることができます。土もそんなに深く掘る必要もなく、植えてから土を固めるのも足で踏めばよいので、まずどなたでも無理なくできます。これが苗木の良いところです。大きな木ではこうはいきません。

　苗木を植えるのには、この他も重要な意味があります。これは少し専門的なことですが、苗木を一平方メートルに二、三本植えても、それが全部育つわけではありません。自然の仕組みとして植えた木が競争し、強い木が残る。根をしっかりと張って、他よりも大きく成長してゆきます。大きな木との競争に負けた弱い木はその下になり、光がとどかないようになるので、もう大きくならない。このようにして強い木が育ち、森がつくられていきます。いっせいに伸びればモヤシみたいに細い細い木になって、病気や強風で全滅するかもしれない。森はそういう仕組みで成長していくのです。

強い苗木だけが生き残りそこに生態系が広がっていく

―なるほど、苗木が競争することで大きな森が生まれるのですね。最終的に残る強い木はどの程度ですか。それにしても、続けて観察しなければわからないことで

「2001滋賀県植樹の集い」の風景

すね。

今井　それはよく聞かれることですが、二十年経てば百本植えて二、三本でしょうか。育つ場所や木の種類など条件によって異なりますが…。それと雑草ですね。苗木の間は、除草を行うわけですが、どうしても苗木の上に草が被ってきて、弱い苗木はやがて枯れてしまい、ほんとうに強い木だけが育っていきます。自然が自らを育む知恵です。このあたりも、ご自身の目で確かめながら、実感していただければと思います。樹木が大きくなれば昆虫や小動物も入ってきます。森ができるということは、少しずつ自然が形成されるということです。森の中に自然の生態系が広がっていくわけです。このようにお話すると、森づくりが自然再生であることを直感的にイメージしていただけるのではないでしょうか。

―「びわこ地球市民の森」がめざしておられる森のイメージが見えてきたような気がします。ところで、どのような種類の苗木を植えておられるのですか。

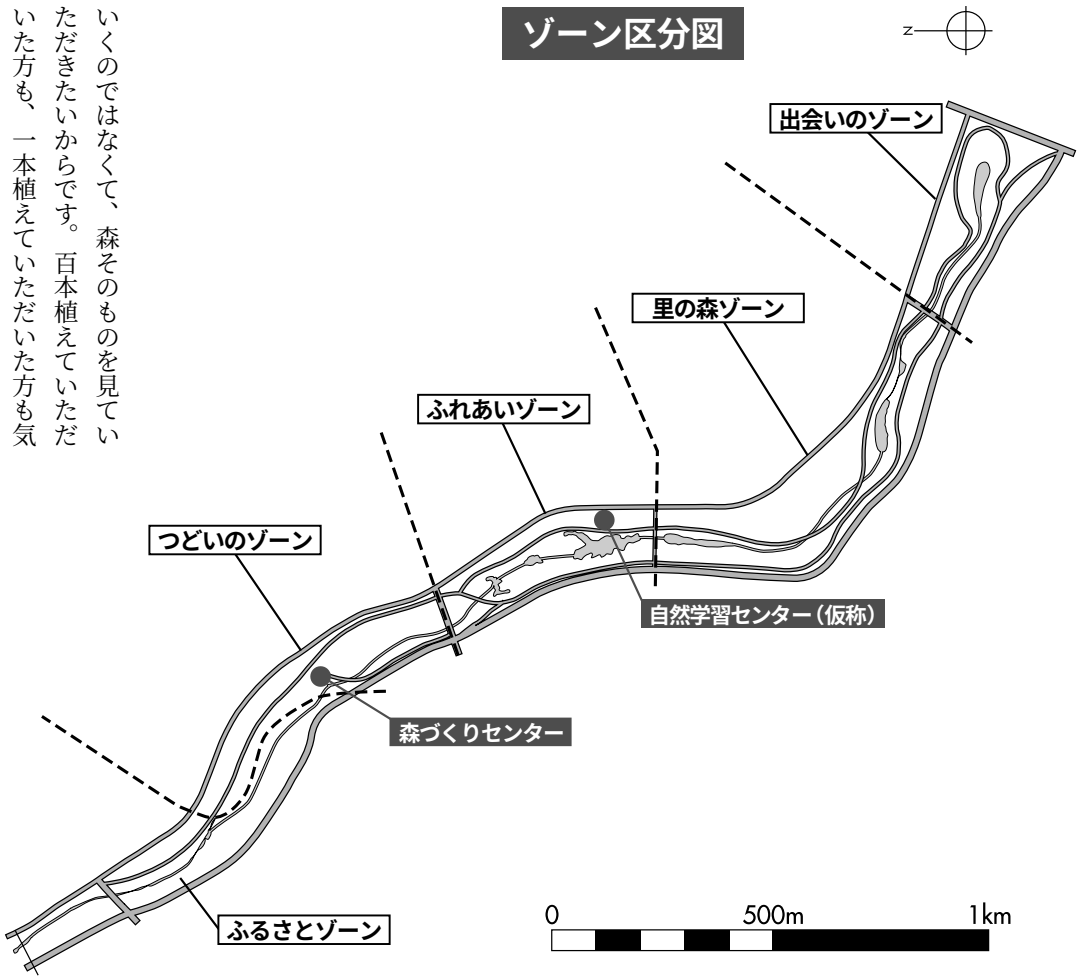
今井　少し基本的なお話になりますが、地域の自然環境には、地域ごとに固有性があります。樹木の成長も、もし、人手を加えなければ、滋賀県の自然条件に適した樹種が育ち、森になってゆきます。かつて、身近にあった林や森の姿です。「自然と人との共生」を考えてゆくには、地域の本来の自然を理解し、ふれあうことが原点になると思われます。こうした考えから、「びわこ地球市民の森」づくりでは、郷土に根ざした森づくりを目指しています。樹種としては、神社に多いシイ・カシ類、ツバキなどの常緑樹（照葉樹）と、近在の里山で見られるクヌギ、コナラ、ヤマザクラ、ヤマモミジなどの落葉樹が主体になります。三・二キロメートルの骨格部分に照葉樹林帯を、両側に里山の落葉樹を育てることにしています。県内で育ちにくい樹種や、また、郷土種でも勝手に植えては自然な森の姿が整いにくいので、あらかじめ苗木の種類を定め、計画した場所に植えていただくようお願いしています。

それぞれのテーマに基づく多彩な五つのゾーニングを計画

―ちなみに、苗木の一本のお値段はどのぐらいなのでしょうか。植樹した木にはその方の名前などが明記されるのですか。

今井　そうですねぇ、平均して五、六〇センチのもので一本四百円ほどです。春の滋賀県主催の植樹行事の苗木は、県が準備しています。それ以外の個人や団体・企業での植樹活動では、それぞれご負担いただいております。名札はお付けしていません。苗木なので付けることが難しいということもありますが、先ほど申し上げたようにすべての苗木が成長するわけではありませんので…。それと大切なことは、自分の植えた木だけを見ていくのではなくて、森そのものを見ていただきたいからです。百本植えていただいた方も、一本植えていただいた方も気持ちは同じだと理解しております。すべての方に同様の目線で森づくりにかかわっていただき、森が育っていく姿を見つめていただきたいのです。

―森は五つのゾーンで構成されていると伺いましたが、それぞれのテーマなどを



教えていただけますか。

今井　計画図（ゾーン区分図）でご説明すると、右側がかつての川の上流で左側が下流です。これを五つのゾーンに区分して整備を考えています。全体の長さが三・二キロメートルですから一ゾーンが五〇〇メートルから七〇〇メートル程度。一つ目の森の入り口にあたる所がエントランスゾーン。人と森との出会いの雰囲気をつくり、多様な森への案内のエリアです。二つ目と三つ目のゾーンが中心です。二つ目の部分は里の森ゾーンと呼んでいます。どちらかといえば里山的な雰囲気のある場所で、季節の花々や木の実がある森…森の環境学習のフィールドを想定しています。三つ目はふれあいゾーン。水路や湿地も取り入れて、森の環境とともに水辺の環境学習ができるように考えています。四つ目がつどいのゾーンで現在ほぼ整備ができたところです。ここでは、自由に交流して自然と遊べる新しいタイプの都市公園として、草地広場など積極的に活用していただければと思っています。五つ目はかつての野洲川の河畔林を残したふるさとゾーンです。野鳥も多く、キツネも見かけます。現状を生かして整備の予定です。ご覧のようにこれらのゾーンが完成するのはまだ先になります。

子どもたちが自然を学ぶ「生きた教材」としても理想的

―中核である「森づくりセンター」の役割は何ですか。子どもたちが自然との共生を実感できる「生きた教材」としてご活用もお考えですか。

今井　ここの役割がしっかり機能しないといけないと考えています。現在の建物は仮事務所的なもので、今後、「自然学習センター（仮称）」の機能も兼ねた施設が上流に予定されています。その役割については、まず、これからも県民参加による植樹を続けていくために、その受け入れ体制を万全なものにしていく必要があります。次に育樹。継続したきめ細やかな管理体制を確立させなければなりません。たとえば、自然の山林であれば水をやらなくても大丈夫ですが、ここではしっかりと水を与えなければなりませんし、除草も欠かせません。すでにボランティアの方々のお力もお借りしています。森づくりサポーターの皆さんです。個人で約百七十名、ボーイスカウト、ガールスカウトも参加いただいています。このほか一般の方々が随時加わっていただき、森づくりの輪が限りなく広がっていけばと願っています。

　そして情報の蓄積と発信です。植樹していただいた方のリストを完璧なものにして、再訪された時に、すぐにその場所へご案内できるようにしたいと考えています。また、森の成長の記録や関連する情報を皆様に発信していきたいわけです。成長してゆく森の姿をニュースレターなどに託してお知らせできれば、植樹された方々の感慨も深まり、みんなの手で森を見守り、育てていくという構想もより着実な事業になっていくからです。

　もう一つは、森の成長の調査と記録です。現在、四季の観察を実施しています。森が育っていけば植物の種類なども豊かになっていきます。生態系の移り変わりも確認できます。このような基礎的な情報がこれから非常に重要になってきます。自然環境保全の資料にも役立ちますし、子どもたちの自然学習の「生きた教材」としても理想的です。たとえば、学校の総合学習の授業にも大いに活用していただきたいのです。そのためにも環境学習や自然観察をサポートできる設備なども整備したいと考えています。また、自然学習のスタッフも県民参加、ボランティアで行っていただければ、さらに幅広いものになっていくのではと思っています。

　県民の手による森づくり「びわこ地球市民の森」は、いま二十一世紀の明日に向けて動きはじめたばかりです。そして、この構想は百年の未来を視野に入れた「自然と人との共生」の壮大な実験ともいえます。ぜひとも数多くの皆様にご参加いただきたいと願っています。

森づくりセンター

市町村
―エコの輪

八日市市生活環境部 花と緑の推進室

県内の市町村での環境への取り組みを紹介していきます。

里山との共生が、人を豊かにし環境保全の心を育む

河辺いきものの森 ネイチャーセンター 丸橋 裕一 さん

河川に沿って分布する河辺林と呼ばれる森林は、かつて里山として大きな役割を果たしていました。北海道をのぞく全国の河辺林の二割が滋賀県にあるといわれ、滋賀県らしい自然環境ともいえる河辺林。その保全に取り組む八日市市では、薄れていた自然と人との関係を再生することで市民意識が向上し、保全活動に活力が生まれています。

失われゆく平地林を守れ

琵琶湖の東岸に位置する八日市市では、一九九八年から市内最大規模の平地林の保全活動を開始しました。琵琶湖に注ぐ一級河川のひとつである愛知川の河辺林一帯には、愛知川の氾濫をくい止める水害防備林、そして薪や柴を供給する農林用という二つの大きな役割がありました。しかしながら大きな堤防がつくられ、ガスや電気が普及すると、洪水の頻度も低下し、薪や柴、落ち葉を燃料や肥料として使う必要がなくなって、人との結びつきも薄れてゆきました。そのため工場用地や砂利採取場としての開発が加速度的に進みました。

そんな中、かろうじて残ったのが建部北町の約一五ヘクタールの平地林。開発の対象になりやすい平地に、これほど大規模な森が残っているのは珍しく、伏流水や氾濫原だったせいか、低海抜地でありながら山地の動植物が生息することが研究者にも注目されている地域でした。このまま放置すれば、いずれ森が消失してしまう恐れもあることから、残された平地林を守ろうと八日市市では複数の森林所有者らと二十年間の借地契約を結び、保全・整備することとなりました。

しかし自然にできた山と違って、里山は周期的な伐採など人の手を適度に入れることで、バランスのとれた生態系が保たれています。手入れを怠れば、そのバランスは失われ、背の高い樹木は伸び放題、その下を背の低い常緑樹が覆い、鬱蒼として下草が生える余地がない地帯。かつて生活のために家のそばにあった竹が、無秩序に繁茂して植生の単純化が起こっている地帯…。市が借地契約した当時の愛知川の河辺林は、現在の美しい姿からは想像もできないほど荒れ、とてもそのまま放置できない状態でした。

このため、森の整備事業に先行して、市の呼びかけでボランティア団体「遊林会」をつくり、自分たちができることからやっていこうという考え方のもと、一九九八年から河辺林の保全作業を始めま

ネイチャーセンター

した。

二〇〇二年三月からは一帯を「河辺いきものの森」として市民に開放。自然観察や体験学習を行う拠点として、山小屋風のネイチャーセンターや炭焼き小屋、野鳥観察小屋を備えました。買い上げでなく借地の形態をとったこと、市内の自然保護・公園管理全般を担当する「花と緑の推進室」が、市役所から敷地内のネイチャーセンターに移動して所管したこと、そして何よりも、事業に先立ってボランティア団体が保全活動を始めており、事業終了後も森の保全や運営にかかわり続けているということが、この事業の特徴です。

「木を伐って森を守る！」保全ボランティア活動が生きがいに

「遊林会」が立ち上げられたのは、折しも全国で里山への関心が高まり、森林ボランティア活動が盛んになり始めた時期。初回は五名とわずかな参加ながら、市民の講座での呼びかけが効を奏し、二回目には二十名が参加しました。その中心はかつて山や森で遊んだ経験のあるリタイア世代。その後は会員が友人を連れてくるなどして口コミで広がり、現在は子どもから高齢者まで約五十名が、茂りすぎた樹木の伐採や落ち葉かき、炭焼きなどさまざまな作業に携わっています。

「遊林会」の活動が活気にあふれているのには、いくつかの理由があります。まず、発足時に自治会などに参加を打診して人数を集める「お願い型」の呼びかけを一切行わなかったことが挙げられます。この先二十年、三十年と森を守り続けるためには、「お願い型」で人員を確保していたのでは継続に無理が生じるとの判断からでした。その結果、初回こそ集まりが悪かったものの、二回目以降は予想以上の反応がありました。

それは、ボランティアのやり方に工夫をしているためです。「河辺いきものの森」をふらっと訪れた人が気軽に参加できるよう、作業メニューは毎回その日に配っています。一回のメニューは五つないし六つで、チェーンソーで木を伐るというハードなものもあれば、誰にでもできる落ち葉かきやセイタカアワダチソウを抜く仕事、また炭焼きなどの経験を必要とする仕事、さらには食事係まで幅広い作業が用意されています。参加者は、その中から好みに応じて自分のやりたいこと、自分にできそうなことを選んでいきます。やり手がいない不人気の作業があってもおかしくないのですが、毎回どの作業も必ず希望する人が現れます。食事専門に毎回訪れる人もいます。先に帰っても、遅れて来てもよい決まりです。こうした自由度の高さが、逆に会員定着率を上げているのです。

「遊林会」主催の自然観察会

これらの活動スタイルに加えて、成功の要因として大きかったのが、都会に住む人たちにとって、草刈りや木の伐採が、レクリエーションになってきているという事実。田園地帯の残る八日市市で、伐採や草刈りなどをどの程度レクリエーションと捉える人がいるか懸念されましたが、自然とふれあう楽しさは人々を魅了し、わざわざ遠方から時間をかけてやってくる人もいるほどです。木を伐ること自体がおもしろく、さらに余分な木を伐採して明るくなった森に翌年になって花が咲き始め、カブトムシがくるなど変化が目に見えてわかるので、やりがいを感じるのです。

やがて、毎月第2土曜日だけでなく、第4水曜日も活動日とすることになりました。「平日にもやらせてほしい」という要望が高齢者の会員から出たためです。水曜日には、参加者が一緒に歩きながらその日の状態を見て、「セイタカアワダチソウが伸びて花がついてきたから抜かないといけないな」「じゃあ私がやりましょう」「そろそろ炭を焼こう」と自分たちで作業内容を決めていきます。炭窯は、炭焼きを一から学んだボランティアが作り上げたものです。

ボランティアの継続的な参加を期待する以上、作業を楽しもうとするスタイルを生み出すことが重要になります。「自然を守ろう」という使命感だけでは、やがて負担になり、長期継続が難しくなることも予想されるからです。「遊林会」の名の通り、森で遊び、楽しさを味わいながら自分たちで考え、自主的に行動する会員が増え、高齢者の生きがいの創出にもつながっていることは、里山保全ボ

「遊林会」スタッフによる森の利用ガイド

ランティアの活動が生んだ大きな成果といえるでしょう。

人と自然とのかかわりを学ぶ環境学習の場を提供

「河辺いきものの森」には、現在、キツネやアナグマ、ノウサギなど多くの動物が生息しています。シジュウカラやヒヨドリ、コゲラなどの鳥もいます。植物は外部からの持ち込みをせず、コナラやクヌギなどもともと地域にあった植物を基本に、拠点施設であるネイチャーセンターの周辺にのみ昔の農家の庭先によく植えられていたグミやナツメを植えています。地下水を利用した水辺ビオトープには、整備後すぐにトンボが産卵しにくるなど、水辺の昆虫があっという間に増えていきましたが、なによりも喜んだのは、ジャバジャバと入って遊ぶことができる川がなくなってきた現代の子どもたちで、夏にはびしょびしょになって森の中の川で遊ぶ姿が見られるようになりました。

教師のためのセミナー風景

環境学習の必要性が叫ばれながら、実際に体験させる場が限られる現在、「河辺いきものの森」は、体験学習の場として大きな役割を担っています。市街地の近くにありながら、自然と親しめるとあって利用者は予想以上。来園者が実際に森に入って自然に親しめるようクイズラリーなどのプログラムが多く用意されます。平地とあって車椅子を使っての散策も多く、視覚障害のある人を対象にした自然観察会が企画されるなど福祉面にも積極的に取り組んでいます。

一方、森である以上、マムシやスズメバチもいれば、うるしの木もあります。時には子どもたちに害を及ぼすこれらの動植物だけを森から排除するのは不可能なので、訪れた際に注意を喚起するようにしています。昔は子どもでも何が危険かを知り、危険に遭遇した時の対処法を体得していました。今の子は身近に里山がなくなり、自然界に存在する危険なものをそれと認識できなくなっています。かつて身につけていた知恵を再び取り戻し、未来に継承するために、危険を回避する力を学習させる機会が必要です。

水辺の観察

のこぎりやマッチを使ったことのない子どもが多く、時には工作中にケガをする子もいますが、あえてプログラムから外すことはしていません。初めてのこぎりを持って自分で伐った木を、子どもたちはとても大事にして持ち帰ります。やはり「楽しさ」に結びついた体験は、子どもたちの学ぶ心を育みます。子どもたちが効果的な学習を受けられるよう、教師を対象とした講座も行っています。

職員たちの努力のかいあって、体験学習の成果が少しずつ現れています。この森で体験作業をした学校の生徒たちが、理科の授業で「裏山を調査したい」と言い出したそうです。体験学習でいろいろ木を伐ったりしたのがおもしろかったので、自分たちの住む町を調査したい、身近な裏山のこともっと知りたいというのです。

ボランティアや体験学習の受け入れの最終的なねらいは、こうした地元への還元。「花と緑の推進室」では市内全般の自然保護・管理を行っており、「湖国ぐるり里山フォーラム」の開催や、県内の活動団体との情報交換、ネットワークづくりにも積極的に取り組んでいます。「河辺いきものの森」にとどまらず、身近な自然に目を向け、保全のために行動する原動力となるのは、そこに住む市民。そのためのさまざまな情報やノウハウを蓄積し、発信していくことが、今後の課題です。

一方八日市市では、これからのエネルギーを化石燃料から転換していこうという新エネルギービジョンに取り組んでいるところです。「河辺いきものの森」を拠点に、森から伐り出された木材をエネルギーとして利用するための試みも進めています。

森には無限の可能性が秘められています。心のやすらぎ、未知のものに対する好奇心、何かを発見した時の喜び、自ら作り上げた達成感…。自然とかかわりながら生きる楽しさを体験したら、そこから新たなものを産出し自然環境に還元することも夢ではありません。ボランティアの活用に成功したノウハウを生かし、新たな保全スタイルを構築して全国の環境保全事業をリードする存在となることを目指しています。

東西エコミュージアム見聞記

エコミュージアムとは

「エコミュージアム」とは、エコロジーとミュージアムを結びつけた造語です。日本語では「生活・環境博物館」と訳されるようです。一九六〇年代にフランスで提唱された新しい博物館の考え方で、地域の自然と人間のかかわりを探る新しい博物館のシステムのことを言います。

少し詳しくいうと「地域の自然環境、社会環境・地域住民の生活の発展過程を歴史的に探求し、地域の営みから生まれた遺産（資源）を現地で保存・育成・展示することを通じて地域社会の発展に寄与すること」を目的とし、「エコミュージアムは、行政と住民が一体となって発想し、形成し、運営する。行政は、資金、資材、施設、技術等を用意し、地域住民はアイディア、知恵、情熱、ビジョン等を提供する形で両者が運営に参加すること」を理念としています（引用は山形県朝日町のホームページによる）。

しかしながら、日頃あまり博物館に足を運ばない人にとって「博物館」は重々しい建物で、中には恐竜の骨とか縄文人の生活などが展示してあり、どちらかというと入場者が少ない施設というようなイメージがあります。エコミュージアムとはそういったものではなく、そこに在る地域の自然の森や川などの自然環境や昔からの生活風習などの地域の文化をPRするものであるといえそうです。施設としては大きな「ハコモノ」の大展示室は存在せず、「コア」と呼ばれる中心施設とその周りにポイントとなる「サテライト」という施設や場所が存在します。なお、施設の整備には農林水産省の補助事業である*「田園空間整備事業」を利用していることが多いようです。また、展示物は他から新しいものを持ち込むというのではなく、すでに在るものを保全するという考え方です。

エリアに関しては、複数の市町村をまたぐ広域で行う場合や市長村の特定一地区で行う場合など様々です。そのため、行政と住民が役割分担し共同運営で進めていくことが望ましく、それが目指している方向でもあるのです。運営の事務局となるNPOが存在するところもあります。目的は観光でお金を稼ぐことではなく、「生活するものの満足」のために行うもので、住民の「心おこし」を目標としています。エコミュージアムを実施した結果、宮崎県綾町のように観光事業に成果があがっているという報告も出てきています。

ただ、問題点もあります。たとえば、施設看板などのハード面の充実にばかり目が向けられて、ソフト面が不十分になりやすいということなどです。

ここでは山形県朝日町や滋賀県甲西町の取材を通じて、エコミュージアムの良さや運営の難しさなどを少しでも明らかにしていきたいと思います。

山形県朝日町エコミュージアムについて

山形県朝日町は山形県中央部に位置し、磐梯朝日国立公園の朝日連峰にいだかれた、自然豊かな町です。人口一万人弱ですが、品質日本一といわれるリンゴの生産やワインの生産などが盛んです。ここでは空気を大切にしようということで、

＊田園空間整備事業とは

農村がもつ自然・伝統文化など、日本人の原風景を形成してきた多面的機能を再評価し、都市との共生をめざした美しく豊かな田園空間づくりを目的とします。中心施設として田園空間博物館（コア施設）を整備、そのまわりに存在する農業における美しい景観、伝統的建築物、史跡など（サテライト）の整備、それらと田園空間博物館を結ぶ散策道、旧街道など（フットパス）の整備など、田園におけるエコミュージアムをハード面でサポートする事業です。ちなみに滋賀県は全国一この事業を活用しています。

朝日連峰

住民の七割がお金を出して「空気神社」という神社を建立したり、さらに、昔から山のブナ林の伐採に反対した人がいたなど、地域の環境に対しては昔から住民の多くが高い意識をもっていたという土壌がありました。

そして日本で初めてエコミュージアムの概念を導入した自治体でもあるのです。この朝日町にエコミュージアムを紹介したのは、当地で旅館を営む西沢信雄さん（自然保護活動家。滋賀県大津市出身、現在、朝日町町議）です。

平成元年十月に「エコミュージアム研究会」が設立されたあと、シンポジウムの開催、フランスへの研修団派遣、国際会議開催等を経て、平成十二年六月にエコミュージアム・コアセンター「創遊館」が完成しました。その他、中心となる組織づくり、イベントによる広報、シンボルとなる施設づくりが着々と進められてきています。ここのシステムは、コア（中心施設）として創遊館（役場の隣にある生涯学習センターのような施設で、NPOの事務局がある）が存在し、周辺の集落等に「サテライト」というポイントを置きます。そこには「サイン」というポイントを明示する看板等があり、そのサテライトを説明できる「案内人」が存在するというものです。

コア施設である創遊館ができたことが、町民へのPR活動となりました。ここは町民の交流施設であり、みんなが「学ぶ」場所なのです。先日も早稲田大学の日本語教育研究センターの外国人学生二十五人が「エコミュージアム紀行」と題して朝日町を訪れ、サテライトで案内人の人たちの説明を受けました。そして二泊三日のプログラムの中で朝日町の豊かな自然、その中に息づく知恵、技、文化、歴史を知り、そして豊かな人情は、留学生たちに大きな感動と心に残る思い出を与えたようでした。

創遊館

ただ、これまでの行政施策のように施設（ハコ）はつくったものの、その後の住民に対するアプローチがないせいで、そっぽを向かれたりしては大変です。ただでさえわかりにくいシステムを住民に理解してもらい、共に実施していかなければならないのです。また、地域資源の掘り起こし作業も住民だけでは難しい仕事です。サポートする人材が行政にも住民の側にも必要です。朝日町では、これを実施するためにNPOである「朝日町エコミュージアム協会」を平成十一年に設立しました。本年度より若手理事の安藤竜二氏が理事長に、地元JAを退職した菅井正人氏が事務局長に就任し、地元集落を回り資源調査に乗り出しています。

朝日町エコミュージアム協会事務局（創遊館内）

このような取り組みを続ける朝日町は、全国でもっともエコミュージアムのソフト面で進んだ町といわれています。

甲西エコミュージアムについて

続いて滋賀県において、エコミュージアムを熱心に運営している甲西町で、事務局の役場企画課にお話を聞かせていただきました。

甲西町は滋賀県の南部、甲賀郡にあり人口四万三千人（平成十四年十一月現在）、湖南工業団地をはじめ国道1号線沿いに多くの事業所があり、JR草津線沿いには住宅が増え京阪神のベッドタウンとなっています。古くから住んでいる人より、新しく引っ越してきた人のほうが多くなっています。そういう面では、山形県朝日町とは大きく事情が異なります。また、町の中心的な象徴となるものが明確でなく、古くからの住人の割合が少なくなったことなどから、甲西町としての新たなアイデンティティーの確立が求められているといえます。

甲西町は「日本一住みごたえ」のある町を目指しています。そして、それをエコミュージアムの理念と手法により実現しようと考えています。甲西町の人々が、「地域資源」をどうとらえるかが、甲西エコミュージアムを語る時のカギとなると思います。

甲西町にとって「地域資源」とは何でしょう。「地域資源」とは、そこに「在るもの」です。よ

そから導入するものではありません。そうかといって、古くからの伝統行事や生活様式、建造物だけに限定されるものでもありません。甲西町は、新興住宅に住む人のほうが多くなった町です。これらの地区では伝統は在るものではなく、どうやら創り出すものであるといえます。一つの例ですが、甲西町には芸術に志を持つ人々が多く住む地域があり、毎年春コバノミツバツツジの花が咲く頃に、この地域の女性グループがそれぞれのお宅や創作活動の場を開放しています。書・画・器・染・織などの多くの芸術作品を展示したり、音楽会や茶話会も催されています。地域の人々をはじめ、その行事を伝え聞いた他の地域の人々が、春の一日、一緒になって思い思いに町を巡って各館の作品を鑑賞したり、会話や町歩きを楽しんでいます。昨年から、男性グループが同様な趣旨とかたちで秋に作品展を開くようになっています。エコミュージアムは地域がまるごと博物館でもあり、かつ、まるごと美術館ととらえることもできるのです。

このような甲西エコミュージアムの特徴は、先にハード面を整えないことです。シンボルを造って多くの人にPRするということも大切ですが、長期的な計画に位置づけて地道に取り組みながら、エコミュージアムの理念と手法を住民自身のものにしてもらい、地域に根ざしたかたちで発展させていくというのは、まさにまちづくりの王道といえるものだと思います。ハード面がないかわりにソフト面には力を入れています。それが、役場の広報とは別に『甲西町エコミュージアム通信』発行になり、住民への啓発やPRといった関係者の意気込みを感じる取り組みにつながっているのです。

まとめ

エコミュージアムは、厳密には観光資源ともいえないし環境保全活動でもありません。地域の宝となるものを掘り起こし、記録し、輝くように磨き上げることが重要といえます。しかし、地元の住民にとっては、すぐ生活のためになることを考えてしまったり、地元のしがらみがあって活動に支障をきたすことが多いと思います。

また、市町村行政というのは、今まで国や県から補助金を引き出し、ハード面を充実させる仕事が多く、ソフト面を充実させることは苦手でした。これまでの慣行上、住民側もお金を期待したりして、すぐに地域が潤わない町役場の企画には抵抗も多かったはずです。

エコミュージアムの目的は「自然や文化遺産を保全していくことであり、かつ自然と文化を活かした産業を育成することだ」と朝日町の広報資料にありました。まず初期の段階で住民の心にしっかりとした意識づけや納得がないと、画に描いた餅のようになってしまい、中途半端な生涯学習、観光ガイド、産業振興となる危険性をはらむことになります。それでは今までのいろいろな試みとどう違うのかわからないといわれそうです。

今回の取材を通じてもっとも印象的だったのは、山形県朝日町役場の方が、「実は、滋賀県の琵琶湖博物館のように、地域文化を丹念に掘り起こし、工夫して展示し多くの人々の目にふれるようにするという理想的な仕事がしてみたいですね」と取材の終わりにおっしゃられたことです。遠方まできて滋賀県の話になり、なんとなく恥ずかしいような、おもはゆいような気分になりました。

知ってますか?ヨシのこと

ヨシの活用法開発に期待をかける

西川 嘉廣
（ヨシ博物館 館長）

筆者は本誌前号において、「ヨシとはどんな植物か」「歴史」「琵琶湖とヨシ」「ヨシの機能」にふれ、最後に「目下、最大の課題は、なんといっても刈り取ったヨシの活用法の新規開発です。伝統的用途に替わる、大量需要が見込める付加価値の高いヨシ製品の開発こそが現下の急務なのです」と記しました。

豊かなヨシ原を維持するためには、またヨシの水質浄化機能のためにも、厳冬期のヨシの刈り取り作業を年々歳々繰り返さなければなりません。これまで長い間、ヨシ刈りは農閑期の副業として〈刈り子さん〉と呼ばれる人々によって行われてきましたが、農業形態の変化やヨシ需要の激減のせいで、後継者難に直面しています。

一方では、最近の報道で見られるように、行政や住民団体が音頭をとって、ボランティアによるヨシ刈りが広まりつつあります。筆者も東近江水環境自治協議会という住民団体に属し、ここ数年、ヨシ刈りボランティア運動を展開していますが、滋賀県内だけにとどまらず近隣の他府県からも参加者が多いのはうれしい限りです。

問題は、こうして刈り集められたヨシの用途です。現時点で、最も有望視されているのは、淡海環境保全財団や二、三の民間企業によって開発されたヨシ紙の製造です。今、市場に出回っている紙のほとんどは木材パルプを原料としていて、これが森林破壊、ひいては地球温暖化現象につながっています。この意味で、ヨシなどを利用する非木材紙の普及に大きな関心が寄せられているのですが、残念ながら価格面で木材紙にはとうてい太刀打ちできないのが現状です。紙のほかヨシの腐葉土も開発されており、菊などの栽培に高い評価を得ていますが、これも付加価値という観点からは最適の利用法とは思えません。

パスカルが『パンセ』に遺した至言に、「人間はひと茎の葦にすぎない。自然のなかでもっとも弱いものである。だが、それは考える葦である。」（前田陽一訳）とあるように、今こそ行政・企業・研究者・住民が互いに連携して、英知を出し合い、碧い〈明日の淡海〉を甦らせるために、ヨシの新規活用法の開発に真剣に取り組むべき時であると思います。

財団の ひとりごと
hitorigoto

ゴミを「積極的に捨てる人たち」へ

先日、北風が吹きすさぶ中、県下一斉清掃運動に呼応して財団役職員によるゴミ清掃活動を行った。恥ずかしながら、財団職員のみが集まって清掃活動を行うのは実は初めてなのである（一応お断りしておくが、ボランティアの方々と一緒には毎年行ってきた）。

清掃場所は、湖岸の清掃事業において厳しい指導・監督で鳴らし、「湖岸清掃のプロ」といわれている財団の嘱託職員から「推薦」してもらった守山市の湖岸近くにある道路沿いの投棄「名所」である。

「名所」だけあってゴミの量は半端ではない。一見するだけでも、崩れた段ボールのかたまりが道をふさぎ、ほぼ1m間隔にレジでもらう白い袋に入ったゴミが積まれている。この場所は人目につきにくいため、昼夜を問わず道路際に停められた車からゴミが捨てられていることが容易に想像できる。

拾っても拾ってもゴミがある。缶やビンやペットボトルの下に、またビニール袋があるといった具合である。あまりのゴミの多さに手を休める暇もなく、参加者一同、寒さを忘れゴミと格闘した2時間であった。

ゴミを拾ったのは、道路沿いのわずか500mほどの区間であった。しかし、収集したゴミは土嚢袋55袋分に加えて灯油の携帯缶、車のバッテリー、ホットプレート、看板、段ボールなど大型ゴミを含めると軽トラック1台ではとうてい載せきれないほどあった。県内のものだけでも集めたら、こうして捨てられているゴミの量は……と思うと想像すらできなくなってしまった。伊吹山の頂上から琵琶湖の底までゴミのないところは恐らくないのではないか。

こうした清掃活動を行うと、いかに捨てられたゴミが多いかがわかる。そしてゴミを拾う側に立つことで、ゴミを捨てる人の道徳心のなさが腹立たしくなる。一方、あまりの多さのゴミに直面することで、あきらめにも似た気持ちにおそわれるのである。

捨てられてしまってからのゴミを処理するための法令や仕組みは整備されてきたが、これには手間もお金もかかる。ゴミの責任の所在が明らかなようで明らかになっていない。だから結局、税金で負担することが多くなってしまう。

もちろん、学校や地域での環境学習や清掃活動の広がりも重要であり、もっともっと進めなければならない。しかし、それ以上に重要なことに意外と力が注がれていないのではないか。それは、ゴミが出ないようにすることである。捨てようにも捨てられないような仕組みづくり、ゴミにならないようなモノづくりなど、恐らく「積極的に拾う人」以上に存在するであろう「積極的に捨てる人」に的を絞った工夫が必要ではないだろうか。

清掃活動から事務所へ帰ろうと交差点を曲がったとたん、大きなゴミの山が再び目の前に飛び込んできた……。

ヨシ腐葉土好評発売中！

当財団では、琵琶湖に美しいヨシ原を取り戻すために冬季に琵琶湖全体のヨシの刈り取りを行っております。

古くから、刈り取ったヨシはヨシ簀等に利用されてきましたが、財団では、従来から菊づくりのプロが、ヨシ・カヤでつくった腐葉土を用いて好成績を上げておられることに着目し、ヨシの新しい利用法としてヨシ腐葉土を製作し、財団のオリジナルブランドとして、菊・朝顔づくりの専門家を中心に販売いたしております。

この腐葉土は、透水性・通気性に優れ、根張りが良くなり、根腐れの心配もないため、菊・朝顔だけでなくガーデニング等の土づくりの素材としても最適と存じますので、一度お試しください。

◆販　売　価　格　1袋（元入れ20リットル）500円（税別）

◆送　　料　実費（20袋以上のご注文の場合は、県内無料）

◆問合せ・注文先　㈶淡海環境保全財団
※滋賀県種苗生産販売協同組合加盟の種苗店、
㈱アヤハディオの各店でも取り扱っています。

編集後記

先日、第3回世界水フォーラムに関連する情報収集のついでに滋賀県立琵琶湖博物館を再訪し、あらためて心に残ったものがありました。1つはA展示室「琵琶湖のおいたち」ゾーンの隅にさりげなく展示されている「未来の地層」。琵琶湖の過去の堆積物を断面模型で見せながら、未来のそれも組み込んだユニークな発想の展示品です。その未来の地層にはコーヒーカップやペットボトルが原形をとどめていました。荒涼としたむなしさを感じさせる光景であり、確かにこのような未来が訪れることを実感させるものでした。もう1つはC展示室「湖の環境と人びとのくらし」ゾーンにある昭和39（1964）年の典型的な農村の民家の移築・再建。すでにテレビなどもお茶の間にあるのですが、洗いものは村の水路から取り込んだ洗い場で行われ、汚水は外へは出さず、汚水槽にためて畑の肥料になるようになっていました。少し前まで、このような知恵と気配りが生きていたことに感じ入りました。

原稿の募集について

機関誌『明日の淡海』では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。
・環境問題に対する考えや環境施策への意見・提言等
・環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
・美しい自然や自然保護に対する意見・提言等
※採用分には薄謝進呈
※当財団まで郵送・メール又はFAXでお送り下さい。

発行　財団法人 **淡海環境保全財団**
〒520-0807　大津市松本一丁目2番1号
TEL 077-524-7168　FAX 077-524-7178
E-mail ohmi9@mx.biwa.ne.jp
URL http://www.biwa.ne.jp/ohmi9/
編集・制作　アド・プロヴィジョン株式会社

本誌は資源の有効活用のため再生紙を使用しています。